

2013年度FP報告書

「広い世界を見るのだ。」

塩原良和研究会5期生 川又 友輔

2014年1月26日、私たち塩原良和研究会の10ヶ月に渡るFriends Projectが終了した。最後の日は私たちの願いも通じ、鶴見の高校生たちが全員ラウンジへと集まって来て、最後の企画を楽しむことができた。一日を終えて、このプロジェクトが「居場所」というものを少しでも表現できていたのではないかと思い、ホッと胸を撫で下ろした。そして次にいつ会うかは分からない高校生たちと別れの挨拶を交わした。

振り返るとこのFriend Projectという名のフィールドワークは紆余曲折を体現したかのように迷走した。“受験”という一つの拠り所があった昨年度とは考え方も随分と変わってきたように思う。まず私たちが考える「居場所」とはどんなところかという議論に始まり、私たちは「無目的」という言葉を手にした。そして良い意味でも悪い意味でもこの言葉に振り回されることとなる。理想としての無目的。しかし、無目的ゆえの不確かさやリアルな辛さに私たちは揺らいだ。

私たちは普段の鶴見のラウンジでの活動に加え、月に一回教室の外に出て課外活動のような形で企画を実施し続けた。各企画には区役所向けの表向きのテーマがあったが、それはさほど重要ではなかった。私たちは「スターバックスのオーダー方法を知る」という比喻を用いて、高校生たちが日本社会で生きていく上で、知っていないとできないこと、見てみないと考えることができないこと、触れてみないと感じることを少しでも多く経験してもらえたらという想いを裏テーマのような形で持っていた。そしてこれは私が個人的に抱いていた想いだが、彼らに「広い世界を見るのだ。」というメッセージを感じ取ってもらえたら、とずっと思っていた。これは在日韓国人の差別に触れた映画「GO」で主人公の杉原が言い放ったセリフである。私がこの言葉を胸に秘めていたのに特に深い意味はなかった。ただ純粹に、思ったよりも「普通」で、それでいて「違い」は確かにあって、より繊細な立場でこの社会を生きているかれらにぴったりの言葉だと思ったからである。大それたことは何もしていないが、かれらは広い世界を感じ取ってくれたらどうか。これからも広い世界を見てくれるだろうか。

プロジェクト後半に差し掛かり、このプロジェクトはどのように終わるのかという議論に至った。単に最後の日をどう過ごすかということだけではなく、私たちと彼らのこれからの関係性についての話だ。私たちと彼らの関係性を具体的に言葉で説明してしまえば、私たちが今後すべきこと、する必要がないことがはっきりして、きっと楽だった。楽と言うのは語弊があるが、逆にこうすることが責任ある振る舞いにも思えた。ただ、かれらと私たちの関係性を言葉で説明することはとても難しかった。それ以上に、無理に言葉に押し込めようとする事への違和感があった。人間関係は刻一刻と変化していくものであり、かれらのことを考え続けることが私たちの一つの責任の果たし方でもあると思えた。ただ一つ言えることは、コミットし続けるやり方はもう通用しないということである。その明らかな関係性の変化をこれから先に控え、私たち塩原ゼミ5期生はどのような行動をとるべきか、どのようなことを考えなくてはいけないか。フィールドワークの経験は、きつとここから生きてくる。

「言語化」—そんな当たり前前行動になれてきた私たち。課題でも、試験でも、就職活動でも、何でも「いかに上手く言語化できるか」を重視する価値観の中で生きている。しかし、2年間FPに関わった今感じるのは、「言語化してしまうとわからなくなってしまうものがある」ということ。この活動を通じて出会った一人一人との人との関係性は、個人的には、何とも言語化しにくい、またあえて言語化しないことで成り立つ関係のように感じている。こうした私たちの関係が、「人との繋がり」や「居場所」を考える機会をたくさんくれたように思う。

私は昨年4ヶ月ほど日本を離れ、この活動からも離れた。その間、異国の地からこの活動と毎週のラウンジの様子をずっと見守っていた。また時々、普段はぶっきらぼうな高校生から「元気？」と連絡をもらったりもした。その度に「あの子どうしてるのかな」と感じたりして、そんなことの積み重ねが自分の中で、自分と彼らの繋がりを作ってきたと思う。たとえ物理的な接触は減ったとしても、自分の心の中でそうやって関係が再生産されてきた。時々、不安になるときがあっても、ふと彼らに会うとやっぱりなんだか安心する。相手と直接会わなくても、心の中で相手の存在が残る、そんな感覚を覚えていた。

今の社会の中には、ラベリングのない関係—言語化しえない関係—はなかなか存在しないのかもしれない。いつでも私たちは何かしらの共通の目的をもってその場に集い、お互い関係を築いていく。時には友達として、時には先生と生徒だったりする。しかし、私たち大学生と高校生の関係は、友達でもなければ、先生と生徒でもない。それでもあの場は成り立っているし、居心地もよい。この活動では、そういうことを真摯に考えた。こういった人との関わり方の積み重ねが、大学卒業後も続いてほしい。それが非言語化の領域で自分の心の居場所や心の支えを作ってくれるんじゃないか、なんて思ったりする。

居場所とは結局何だったのか。この2年間で学んだ「居場所」というものは、結局言語化することができないものだと思う。いや、自分がしたくないだけなのかもしれないが。2年間、こういった機会に真摯に取り組むことができた環境と関わってくださった全ての方と、何より同期に、そして先生に感謝している。また、数年後みんなに会ったときに、まるで昨日まで一緒にいたかのように「よっ」と挨拶する姿が目には浮かぶような気がした、そんなFP最終日だった。

私の大学生活のほとんどを占めていたオーケストラで学んだことが、意外にも2年間の鶴見での活動にも通じていることに気付いた。まず、「自然に近づくこと」を目指すことである。音を綺麗にしたり、音の輪郭をつくったりするためには余計な力を抜く必要がある。細かい技術に拘るのは練習のうちだけ。本番は、その場に存在する生の音楽の流れに、いかに自然に重なるかが試される。自然に近づくために、遠回りをして時間をかけながら、余計な力を抜いていく作業。試行錯誤の練習時間。しかし、この時の無駄は決して無駄ではない。必要な無駄である。また、人間が演奏するという事は、演奏者各々が持っている感受性が演奏に表れてくる。「胸の張り裂けそうな思いをしたことがない限り、偉大な音楽は演奏出来ない」という言葉もあるように、傷ついた経験でさえ糧となっていく。そして、私が考える、何よりも重要なことは、「根底で楽しんでいる自分があること」である。たった数十分の演奏が生まれるまでに無数の物語があり、最後にはその場にいることを楽しみながら、たった一度の演奏をするのである。

2年間を振り返って、よる教室というこの活動自体も「自然に近づくこと」へ向かっていたのではないかと思うようになった。2年目のよる教室は、新鮮であった。去年とは何故か違って見える彼らへの驚きがあったからである。違う高校へ進学しても、偶による教室に来てゼミ生と話したり、高校生同士で仲良さそうに遊んでいたりと、解散してもなかなか帰ってくれなかったりと、彼らなりにこの活動につながってくれたこと。去年は受験に向けての勉強がメインだった教室で、勉強そっちのけで遊んでいたこともあるのに、自主的に教材を持ってきたり、バイトや部活や趣味などに真面目に取り組んでいたりと、新たな一面を見たこと。ラウンジ以外の場所で、一緒に過ごせたこと。毎回新しい気持ちで、よる教室を過ごした。私にとっては、鶴見で流れる時間は、1週間のうちでたった一度、のんびり出来る時間。ただその場にいることが自然な時間であった。

5期生同士をつないだ「無目的」という言葉も、「自然に近づくこと」と関係のある言葉なのではと思うことがあった。毎週火曜日の昼間に行われる同期との話し合いは、溢れ出てくる答えのない問いをひたすら考え続けるものであった。彼らのために何が出来るのか。少しでも綺麗な言葉におさまってしまいそうな時には、それに違和感を覚え、疑問に思うことそれ自体を拠り所として、課題を持ち続けた1年間であった。「自然に近づくこと」はそう簡単ではないことを、話し合いを通じて実感した。それでも、よる教室は毎週確かにあった。「無目的」という言葉のおかげで、その都度その場に居た人が個人的に考えた目標（目標とは言えないかもしれないけれど、ちょっとした勇気のようなもの）が存在することが可能になったのではないかと思う。それはまさに、自然なことだ。そして、「無目的」という言葉についていったことで、考えることが皆違う同期が、ひとつに纏まる事が出来ていたのだ。

この2年間で、ただそこに複数の人が存在することで生まれる関係性、一緒にいるというそのものが持つ力を魅せつけられた。時間をかけること、ただただ考えること、人の気持ちを想像すること、その場においてその場の雰囲気を読み取ることによって。そして全ての瞬間において、「根底で楽しんでいる自分があること」を感じた。

笑って過ごす、楽しい時間だったなあ。

私はこのゼミのおかげで、大切なことを確かに感じる事が出来た。あと数週間に迫る最後の演奏会でも、自分はきっと楽しんで弾いていることだろう。そして、5年後にまたみんなで自然と集まる事が出来るように、タイムカプセルの鍵をしっかりと管理しようと思う。



昨年の今頃、同じように一年の振り返りとしてフレンズプロジェクトの報告書を書いた。その中で私は、「一つの常識を押し付けることに意味はないと気付かされた」という旨の報告をした。夜教室を始めた一昨年の春、私は「彼らに何がしてあげられるか」ということばかりを考え、もちろん答えなど分からず、活動に意味を見出せなかった。何かをしてあげようとするのが、時にその人から個性を奪うということに気付くまで、私には一年かかった。

今年は新たに「居場所作りプロジェクト」という名のもと、結果的には毎週「フリータイム」のような活動を続けた。ふざけあったり、二時間半喋り続けたり、誰とも喋らずスマホをいじったり、テストが近づくと勉強道具をもってきたり。本当に自由な空間だった。そして、各々が好きなことをするというスタイルで結果的にあの空間が成り立ち、最後には「本当に楽しかった」と高校生たちに言ってもらえたことに感動している。

私自身は、彼らとより友達らしく、フランクに接することが出来たのではないかと感じている。彼らに対して「こうするべきだ」「それはやってはだめ」といったことを特に強く言う場面はなかったし、そういう態度が無責任だったとも思わない。では、フランクな関係だった彼らはこの二年間、私にとって何者だったのだろうか。

間違いなく、彼らはこの一年、私にとって友達だった。友達という言葉だけでは、ざっくりしすぎているかもしれない。せっかくだから、どのような友達だったかまで考えておきたい。親友だったかといえば、正直そうとは言えない。週に一度、決められた場所で決められた時間だけ交流するという関係は、確かに、好きなときに、好きな場所で会う友達とは違う。共通の趣味があるわけでもなく、また考え方が似ているわけでもない（と思う）。歳も離れている。それでも、友達だと思えるその根拠は何なのだろうか。

きっとそれは、彼らと会ったあと、区役所への報告書をまとめながら、彼らとの会話や彼らの素振りを思い出し、想像し、また彼らのことを毎週ゼミ生たちと話し合うということが習慣としてあったからではないか。またその習慣によって、私は、彼らと接していたときの自分自身のことと同時に考えていた気がする。例えば高校生の誰かが何かを言ったとき、自分はどう思っていたか、なぜそのように感じたか、など、意図的ではなく、彼らのことを考えることに付随して、自然と考えていた。そして、そこまで自分のことを振り返らせる存在は、私の友達の中でも、それほど多くはいない。彼らとの交流自体は非常にフランクであったし、そのフランクな関係が私自身も気に入っている。でも、ただ単にフランクなのではなく、その裏で、彼らは私に内省させる存在であったように感じる。交流した後、思い出し、考え、再び交流する。そしてまた内省する。彼らとの関係は、交流と内省の繰り返しで成り立っていた。内省というプロセスがあったことが、彼らを友達と感じられる深い存在として認識していた理由なのではないか。

私は今のところ、彼らの将来や進路には、全く責任を感じていない。友達とか言っておきながら無責任だと言われるかもしれない。しかしそこは、友達とと思っているからこそ、責任を感じないのだと言い訳をしておきたい。犯罪にはもちろん手をつけないでいただきたいが、それでも、どこで何をしようと、彼らの人生であると思っているし、自分が進む道は自分で決めてほしいと思っている。いや、自分で決められる強さをもってほしい。そして彼らにも、自らを内省させるような人と、いつか出会ってほしいものである。

今年も無事に居場所作りプロジェクトを完走できて良かった。「夜教室」を合わせると、個人的には3年に亘った鶴見通いも今月で最後かと思うと、大変感慨深いものがある。また来春からの仕事の都合上、土曜日にふらっと立ち寄るといふことも難しそうなので、この場所との別れに際し、考えた諸々のことをざっくりと言語化しておきたい。

ゆっくりと時間をかけて構築されてきた居場所(=空間+文脈)は、僕にとって大変居心地の良いものになった。かつてのように肩肘張った感もなく、高校生たちとの会話に詰まること(というより、会話に詰まる状況を気まずいと感じること)も少なくなった。しかし、居心地の良さについて他者に同調させてはならないし、他者の居心地の悪さに対する想像力は決して失ってはいけないと改めて感じさせられた。20人の参加者がいて、19人が居心地の良さを享受し、大いに騒ぎ喚いていたとしたら、残りの1人の圧迫感はどうか。「今、なんか、居心地良いよね」という曖昧なことばが沸々と現れるにつれ、我々は他者の居心地の悪さに対して無自覚になり、想像力を失いはじめ、こうしたリスクは大きくなる。

思えば、同じようなことを小学生の自分から教えられていた。「クラスでさびしそうな人がいたら、すすんで声をかけてあげましょう」ということだ。だが、これが本当に、とても難しい。一人、楽しげな輪から抜けて声をかける勇気もいるし、声をかけるにしても、そのドミナントな空気への同調を迫る声のかけ方であれば逆効果かもしれないし、やっぱりまだまだ僕にはこのセンスが足りていないと、今年の活動を通じて痛感させられた。幸いゼミのメンバーの中には、こうした面において優れた感性を持っている人が何人かいた。彼・彼女らから学び、これから自らが出会う新しい居場所で少しずつ実践していきたいと思う。

全員が全員、永遠に居心地が良い居場所なんてありえない。理想の居場所は追い求めるもので、現実には在るものではない。決して悲観論としてではなくて、前向きな気持ちでそう思う。そうした自覚のもとに居場所はメンテナンスされ、拾い拾われ、形質を変えながらアメーバ状に維持されていくのではないか。

「フレンズプロジェクト」というネーミングからはなにか理想的で、一年の終わりに完成し、アルバムにしまわれるものというイメージが想起されてしまう。ゆえに違和感を覚えるのだが、この違和感すら塩原先生によって予め設計されたものなのでは、という話をしたのも記憶に新しい。でもやはり、この違和感は拭えない。人間性の粘り気や、居場所の常にプロセッシブな不定形さなどから連想して、「アメーバプロジェクト」と呼びたいところだが商標がやや気になる。

大仰なことを言えば、完成(目標の達成)に向け、最短距離を算出し、最高速度で駆け抜けるというのが、効率的で合理的な現代社会においてドミナントな思考様式のようなものだ。この居場所作りプロジェクトというミッションと対峙した当初の自分が、そのせつやかなルールの呪縛から逃れられずにいたことを思い出す。しかし最後には(個人的には)完成を否定し、最短距離を否定し、最高速度を否定しようとした。アメーバ状の物事や人間関係の在り方を受け入れた今の自分の視野は、確実にかつてより開けているはずだと思いたい。

文の体裁が、連想ゲームになってしまった。しかし鶴見について想いを馳せるときは、いつも決まって連想ゲームに耽ってしまう。それが、鶴見で学ぶことが、日々日常のあらゆる経験とゆるやかにつながっていることの証拠なのかもしれない。「学校で教わったことなんか社会にでたらなんの役にも立たないよ」と言う人も多い中で僕は、この一連の活動で得た感性を後生大事にしていこうと思う。

改めて、3年間大変お世話になった塩原先生と、日々の活動の中でたくさんの学びを与えていただいた3~6期の多彩なメンバーに改めて感謝したいと思います。ありがとうございました。

・子供達との繋がり方を考え直す一年だった・

フレンズプロジェクト前の一年は受験という目標があり、皆でそこへ向かって敷かれているレールに沿って走ることで、ある程度まとまることができていたと思うし、高校生との繋がり方が分かりやすかった。共通認識や共有できている目標があると人は繋がりやすくなると思う。だが、今年は同じ目標に向かって走ることはできず、ゼロからゼミ生で考えた企画を高校生と実施することで居場所の存在自体をなんとか繋げていた気がした。初めは、企画をする意味がよく分からず、企画と企画の間にある「普通の勉強の日」もどう捉えれば良いかよく分からずにいた。知らずと私自身、正直「普通の日」は行く気が失せていた。企画に参加して、自分も楽しみたいと自分勝手になっていたところが大きいと思う。大事なものを見失っていた。子供たちとの繋がり方は、連絡をとって話すことで繋げることができていると思ってしまっていたが、人との繋がり方は直接会わないと育まれない。それをあまりすることができなかつた一年だったと今反省している。

・成長を感じる一年だった・

だが、それだけではない。勿論、ポジティブな発見もあった。うさん臭く聞こえるかもしれないが、高校生達の優しさを感じ、大人な一面も持つことを発見した。企画を通して、料理を普段からするためリーダー的存在になって料理を進めてくれたり、高尾山に登る際にお互いのことを気にしながら登ったりと、気配りができ、リーダーシップを持つ大人に成長していたことをみることができたのは今年一番の喜ばしい出来事だった。高校で本当にいろんなことを学んでいて、中学生の時に頑張った甲斐があったと感じてくれているのだろうと思うと非常に嬉しい。かれらの成長を感じることができたことは宝物である。

・企画の思い出・

先ほども書いたように、企画を通して普段見えないところを見ることができた。高校生も私達に対してそう思ってくれていただろうか。お互いが普段の夜教室ではシェアすることのなかった自分の姿を無意識に見せ合っていた気がした。非常に楽しかっただけでなく、有意義な時間だったと振り返って思う。

・二年間を振り返って・

この二年間を振り返って思うことは沢山ある。初めての春合宿で自分の研究内容を発表し、夜教室について考えていたことが非常に懐かしい。何も知らなかったのに、知っているように思っていた自分が初々しく思える。今でも考え方が変わったのかとか、成長したのかとかよく分からないけれど、人と人の繋がりを少し信じるできるようになったと思う。そこにいないといけないから、或はその人と一緒に何かをやらないといけないからその場において、その人と一緒に繋がろうとする場面が今まで多かったが、今回久しぶりに、「いなくてもいいし、やらなくてもいい」という不安定な土台の上に人との関係を築こうと挑んだ。やがて、不安定だった土台は信頼関係が強まるにつれて安定した土台へと変化し、いなくてもいいけど、いたいと思って行く場所になっていった。ずっと成長を見せ合い、繋がっていたい子供たちに出会えたことは幸せであるし、ゼミ生との活動も非常にいい思い出となるだろう。

最後の日には改めて、学び合い切磋琢磨し合ういい居場所ができていたと私は思った。フレンズプロジェクトは居場所を濃いものにしたと思う。

Friends Project 報告書

5期 安齋春奈

1月25日土曜日、私たち5期生の2年間のフィールドワークが終わった。
ありきたりな言葉だけど、長かったような短かったような、不思議な2年間だった。

昨年の春、高校合格という明確かつ大きな目標があった時期を終え、2年目のよる教室には明確な目標はなくなってしまった。昨年度は受験という短期的なことだけでなく、もっと長期的で、私たちだからこそできることをしたいと思っていた。だからこそ、鶴見よる教室を「外国につながる子供たちの可能性を一緒に探る場」にするというコンセプトを作った。今思えばこの抽象的で形のない目的も、受験という明確で大きな目標の中に含まれていたからこそできたことなのかもしれない。

自分の常識や先入観にとらわれずに、相手と向き合う場所。
そこで磨かれるちょっとした出来事に気づく感受性、言葉や態度の先にあるものを考える想像力。
言葉で表せばすごく素敵だけれど、それを実践するのはとても難しい。

フィールドワークの終わりの時期が近づいてくるにつれ、この2年間に対する不安がまた大きくなっていった。決められた時間に、決められた場所で作られ、決められた期限がある空間だからこそ、どうしてもそこに何か意義を見出そうとしてしまう自分がいた。
子供たちにとって私たちはどんな存在なのか、このよる教室はどんな場所なのか。
子供たちのためにと考えているつもりでも、それは自分自身の行なってきた2年間の積み重ねを子供たちに認めてもらいたかっただけかもしれない。
結局最後の最後まで、独りよがりの承認欲求に囚われてばかりだった。

そんな状態で迎えたフィールドワーク最終日。
初めて子供たちから私たちに向けた言葉を聞くことができた。
「この場所があったから高校に入ることができた。」
「感謝という言葉しか浮かんでこないです。」
「5年後成長した姿を見せられるように頑張るよ。」

この2年間、考えて考えて、でも常に空回りしていたような気がしていたのも、結局私たちの「想像」にすぎなかったのかもしれない。
でも、はたから見ればバカバカしいくらい悩んで考えてきたプロセスがあったからこそ、適切な言葉では表すことのできない私達と子供達との関係性に、居心地の良さを感じることができているのだと思う。
少し大人になった姿を見せたい、そういう存在になれたことの嬉しさを素直に感じている。

最後の鶴見よる教室の日、約半年ぶりに子どもたちに会って記憶に残ったことがたくさんあった。時間が開いたことで、以前より子どもたちが格段に大人になっていたことや、ある男の子のことが改めて強く印象付けられたからだ。

1月末の最後の日、みんなで5年後の自分に向けた手紙を書き、タイムカプセルを作った。その後、フィールドワークコーディネーターとして2年間率いてくれたゼミ生に向け、全員で作った映像を見た。そして、子どもたち全員から最後の言葉をもらった。その時の彼らの言葉が、自分の記憶の奥にある彼らから出たと思えないほど頼もしかった。照れながら、5年後が楽しみだ、今の自分があるのはこの教室のおかげだ、と話す彼ら。悪ふざけをしていたり、ふてくされたり、浮足立ったりしていた良い意味で子どもらしい姿が懐かしく感じられた。

その日、様々な場面で素直に気を遣う彼らの姿を見て、子どもたちは私が思う以上に大人になっていたんだということを実感した。思えば、2年間続いてきた学年ミーティングの内容は、当初は子どもたちの生活や行動の心配が主だったが、次第にそれは教室やイベントの計画になっていった。その変化は、子ども達が大人になって心配事が無くなったのか。それとも、ある時、ゼミ生が、「ある子どもが『あいつら頑張ってるんだから協力してやろうぜ。』って言った。あいつら意外と気を遣ってるんだよ。」と言っていたように、気を遣って心配させるようなことを話さなくなったのか。何が原因かはっきりさせることは出来ない。しかし、いずれにしてもそこに子どもたちとゼミ生が築いてきた信頼感をみて、両者を尊敬してしまった。

また、もうひとつ印象に残ったことがある。私が教室に通えなくなる前、よく話していたある男の子のことだ。遅れてきたその子は、久しぶりに教室へ顔を出したらしく、目が合うと手を振ってこちらへ移動してきてくれた。自分の事を覚えていてくれたことに驚きつつ、彼が好きな卓球の話を聞いたり、一緒にスマートホンのゲームをしたり。自分と彼を含め、あちらこちらで思い思いに過ごしている居心地の良い教室。もっこの教室に来られていたら、と寂しさを感じた。

一昨年夏、子どもたちとの接し方を悩み、よる教室とは、居場所とは何か、をゼミ生で延々と議論していた頃から、子どもたちと何がしたいか、将来どのような関係を築きたいかを話すようになっていった居場所作り。こちらが迷走してしまった時も、子どもたちは「あいつらが呼んでんだから行ってやろうぜ」と来続けてくれた。どちらかの気持ちが欠けたら成り立たない関係がある。鶴見よる教室は、活動自体の何倍もの時間を掛けて考えてきたゼミ生と、そこに来ることを楽しみにしていた子どもたちの両者が、お互いに築いてきた場所なのだと改めて実感した。

5期生としての活動の全行程を終えた今、
こうして筆をとることにためらいを覚える。

僕にとっての鶴見での活動は、答えのない何かを手探りで探すプロセスそのもので、
教室やミーティングスペース、三田の家、あるいは居酒屋で、みんなであれこれ悩んでいる時間そのもの
だったからだ。

現に2年間を終えた今、結局自分が高校生にとって何者であるのか、どんなことを成し遂げてきたのか、
半ば足かせだった「無目的の目的化」は実現されたのか、など、振り返ったら山のように積もっている話
し合った事柄の数々も、まったく簡潔に説明することができない。
答えがないのに、あたかも答えを探しているかのようにあれこれ悩んでいる時間こそ、僕にとっての塩原
ゼミであり、よる教室だった気がするのだ。

今こうして、まるで何かを得たかのように、あるいは何かを与えたかのように、総括を言語化してしまっ
たら、
大事に書き溜めてきたノートがどっかに行ってしまうような、
卒業を機に思考を止めてきりっと社会人に切り替えてしまうような、
そんな焦りにも似たモヤモヤが、心のどこかにあるのである。

そんな思いを抱きながらも、決して忘れてしまわないように、書き残しておきたいことがひとつある。
それは、「1/25、高校生たちが全員ラウンジに集まってくれたこと。」
そして「5年後にまた再会する約束をしたこと。」
たぶんこれが、僕たちが2年間あれこれ悩んできたことのひとつの結果であり、可能性なんだろう。

何をするでもなく、ふと立ち寄れる「居場所」をつくること。
まっすぐで理想家で、頭でっかちな5期生たちの掲げた目標は、間違いなく自分たちの首を絞めた。ぶー
ぶ一言されるとこっそり傷つき、あれこれ話し合い、次の週に何もなかったように再会できてホッとする。
1年間その繰り返しだった。そんな日々も気づいたら終わってしまっていた。

でも、幸いにも僕たちは、あいつらを思いながらあれこれ考える時間を再び与えられた。次会うときには

何をしようか。また背が伸びているんだろーな。という具合に。

僕と彼らはなんなのか。この活動は何だったのか。どうやら答えが出るのはまだまだ先になりそうだ。

相手に対する想像力をもつこと。

塩原ゼミのさまざまな活動の中でこの大切さを実感しました。そうしたら、相手に何かを言うことがこわくなる時が増えました。「(傷つけてしまうかもしれない)」「(私の知らない悩みを抱えているかもしれない)」「(私の偏見かもしれない)」…こういうことを一度考えてから相手に言葉を発したり、発しなかったり。そんな瞬間が増えるようになりました。私は塩原ゼミに入る前、慶應生がみんな同じように見えていました。みんな同じような格好をして、同じような話をして、同じような価値観をもっている。それに気持ち悪さを感じてしまって、なんとなく、大学の友達とは距離をとってしまっていました。(距離をとってしまったから同じようにしか見えなかったのだろうと今は思いますが。)

でも、塩原ゼミに入ってゼミで過ごす時間が増えるにつれ、ゼミの先輩や同期には少しも同じところはありませんでした。それぞれ違う趣味があり、価値観があり、バックグラウンドがありました。そして自分自身の個性にも気づきました。ゼミ生以外にも、鶴見や川崎のフィールドワークで中学生、高校生と交流する中で、さまざまな価値観に出会いました。自分が同じにしか見ようとしていなかった大学生は、みんな違って、みんなに素敵などころがありました。

しかしその分、自分の価値観だけで何かを言うことにすごく大きなリスクがあることに気づきました。実際に、自分が当たり前と思っていたことが相手にとってはそうでなかったことがありました。その時は傷つけてしまったのかもしれませんが、相手が自分と全く同じということはありませんということに気づいていながらも、ふとした時に出てしまう言葉に、相手に対する想像力が欠けているときがありました。

そんな経験を重ねるうちに、相手に何かを言うことがこわくなりました。相手を傷つけてしまうのではないかと。ただそのおかげで、相手の価値観や、バックグラウンドに想像力をはたらかせてから何かを言うことが自分の中で当たり前のことになってきました。

もちろん今でも、相手に対して完全に想像できているとは思いません。それが「想像」である以上、自分の想像とは異なった現実があることも当然あり、ささいな言葉が相手を不快にさせる状況に今でもなることがあります。

それでも、相手に対する想像力を働かせることを忘れないこと。もし相手を傷つけてしまったら、自分の考えを振り返り、変わっていくこと。それが今後のゼミ活動をしていく上で、鶴見で中学生や高校生と関わる上で、というか私が人と関わるすべての場面において一番大切なことなのだと感じています。

春に中学生たちと出会ってから約10か月が経ち、高校受験が間近にせまっている。フィールドワークが始まった当初はとにかく不安だった。どんな子たちなのか、仲良くなれるのか、うまくやっていけるのか・・・。

「学習支援」なんだし、高校受験もあるし、勉強を教えなければならないのだと思っていた。

“勉強もしっかり教えて、毎週来てもらえるように楽しい場所にしなきゃ”

私たちが抱えていた、そんな義務感のようなものを中学生たちも感じとっていたのだと思う。

そのせいか、後期のある週、教室に中学生は誰も来なかった。

勉強のために必要とされる場所にも、楽しいと思える場所にもなっていなかったことに気付かされた。

どうしたら来てくれるのか、どうやったら楽しくなるのか、私たちはかれらに何ができるのか。

考えても話し合っても、はっきりとした答えなんて見つからなかったけれど、でもそんなことをしているうちに、私たちはいつしか中学生ひとりひとりについて真剣に考えるようになっていた。

業務連絡のように一方通行だったメールも双方向になっていて、なんだか静かでまじめな雰囲気だった教室も、わいわいにぎやかになって、気づいたら、よる教室が楽しいと思えるようになっていた。

関係を築いていくには時間がかかって当然ということ。

先入観と現実のギャップに驚くことがあっても、そのつど対応していき、考えるのをやめないこと。

しっかり目の前の相手と向き合うこと。

よる教室は私にすごく当たり前だけど大切なことを気づかせてくれた。

よる教室を通して、私たちが中学生たちに何かしてあげられたのかどうかはわからないけれど、毎週土曜日にあの場所で数時間一緒に過ごしたという記憶が少しでも残ってくれば十分なのではないかと思う。

来年度も活動を続けていくにあたって、やっぱりちょっとは不安もあるけれど、何か問題が起こっても、ゼミ生と高校生たちとしっかり向き合っていきたい。

2013年度FP報告書

法学部政治学科4年 塩原良和研究会5期

堀内 康資

塩原ゼミの二年間の活動で最終的に辿り着いたのは、「線引き」の問題でした。プロジェクトを進める中では「支援者-被支援者」の構図が敷かれるわけですが、その「支援」はどこまで行うのか、という問題です。もっとも、これが「支援」という言葉で表されていれば、「学習支援」「教育支援」というように、支援の内容が明確になるので、そこまで難しくはならないのですが、私たちは「支援者-被支援者」という構図を拒もうとしてきました。それはすなわち、「支援」を「支援」でなくすことであり、判断の参照点を捨てるものでした。要は、どこまでおせっかいをするか、という問題です。

その曖昧な状況の中で、私たちは幸運にも「コミットし続ける」という方法が可能な状況にありました。即ち、何をすべきかを毎週のように議論する、それを実行し、効果を測定し、次をどうするか考える、ということです。このサイクルが駆動する限り、私たちが決定的な失敗を犯すリスクは少なくなります。「支援」という言葉の内実を常にアップデートしていくことで、私たちは「結果の責任」を「労力を割く」ことで代償していたのです。

しかし、それは責任ある態度なのでしょう。私が一番悩んだのはその点です。その「責任」とは、当然、法的な責任でもなければ、道義的責任とも必ずしも一致しません。自分で勝手に感じる、思いつめるという意味での責任です。細かい決定→検証のプロセスの中で、その責任を放棄し続ける限り、私たちは後悔をせずに過ごすことが出来ます。

そのようなコミットメントが可能なのは、私たちが「子供」として多くの人に支えられていて様々な余裕があるからにはほかなりません。そこには、社会構造から目を背け、「自らは想像的である」という思い込みに陥ってしまう危険性があります。なにより、このような責任逃れ＝”決定的な決定”を回避し続ける態度で得た学びは、様々な価値に発展する種としての可能性を秘めてはいても、広範な社会問題に直接適用可能なものではありません。

世界の貧困を理解するために現地に赴くと、あまりに強烈な経験を絶対化し、複雑な文脈への想像力を失ってしまうこともあると聞いた事があります。

後悔することを恐れる方法論にも、大きな価値はあります。しかし、同時にそれを本質化してしまう危険性もあります。現代にはこのタイプの言説が蔓延しているように思えてなりません。現場より、統計に基づいたほうが”正しい”こともよくある話です。

両者の視点を含み込み、より良い状況を導こうとするのなら、間違いなく決断と責任を受け入れることは不可欠です。後悔することを恐れない、別の視点からの「自己責任」は、誰もが持たなければいけない態度だろうと思います。それはつまり、自分が社会構造の中の優位な立場にいるとしても、その立場なりに”正しさ”を求め、自分が傷つく可能性を受け入れる、ということでもあります。

F P 報告書

6 期松永博之

僕が参加するふれあい館の教室には、日本語を流暢に話せる子はほとんどいない。ゼミ生も自分ひとりだし、最初はそんな空間に飛び込んでいくことに、ひどく緊張していた。目の前で繰り返される、中国語、フィリピン語・・・笑い声。そこに自分の居場所が無いような気がして、とにかく居心地が悪かった。

数学を必死に教えるだけ教えて、他愛も無い会話をしようとするのも上手く盛り上げることが出来ず、帰る。自分が思っていたようなフィールドワークが出来ずに焦りを覚えるが、「勉強を教えに来たんだからこれで大丈夫」と自分に言い聞かせて毎週木曜の夜にふれあい館に通う。今思えば最初の 2 カ月くらいはそんな感じだった。

でも彼らと接する時間が長くなるほど、そんな緊張とか不安とか焦りは消えていった。シャイな男の子が笑って喋りかけてくれたり、お菓子を交換したり、休み時間にフィリピン語で盛り上がっていた話を一生懸命日本語で説明してくれたり、そんな小さいことの積み重ねが、互いの関係を深めてくれた。

僕からの働きかけも自然に増えていって、今では彼ら一人一人に合わせた受験対策サポートを必死でやっている（つもりである）。そしてそれに応えようとする生徒の姿勢が見えた時の喜びはとても大きい。（いくら説明しても全く聞いていないというのがほとんどだがそれも今では愛おしく思えるほどである。）

最近、中国語もフィリピン語もこれっぽっちも分からないけれど、彼らの会話の中に自然に入れていく気がする。僕が日本語で話に入っても自然に返してくれる。最初はあれだけ不安を感じた言葉の違いも、今はとても心地がいい。おそらく僕が居心地がよいと感じていることは子どもたちにも何となく伝わっていて、休み時間もとてもリラックスした空気が流れている。

今思えば、最初の頃の自分は「外国につながる子どもたち」という括りを意識し過ぎていた。自分との違いを意識するあまり、「どんな悩みを持っているんだろう」とか「どうしたら相手のためになることをしてやれるだろう」とか「早く信頼関係を築かなければ(焦)」とか、そんなことばかり考えていた。でも人との信頼関係を築くってそういうことではない。目の前にいる相手との関わりを、どんなに小さいことでもひとつひとつ大事にして、時間をかけて、しっかり目を見て声を聞いて応えていくことだ。ふれあい館での活動を通じて、そんな当たり前のことに気付かされた。

高校受験が目の前に迫ってきた 1 月、ふれあい館での勉強時間。ある生徒がテストの過去問を持って「これ教えて、受かりたいよ！」と僕のところに走ってきてくれた。「頼りにされているのかも」という感覚に、嬉しさと責任感を感じた。しっかりとこの子たちの思いに応えたい。そんなことを思いながらふれあい館での大切な時間を噛みしめている。

タイトル: 距離感の演習

フィールドワークでは、常に距離感を測り続けた気がする。

接する中学生と、自分との距離

よる教室という場と、自分との距離

ゼミと、自分との距離

幸い、どれも遠ざかることはなかったと思う。

でも近づいたかといえば、そんなこともない気がする。

それでも少なくとも、どれくらい距離が離れているか、はよく分かった。

初めはおぼろげだった、それらと自分との距離感。

今までの人生では、自分の身を守るために曖昧なまま放置してやりすごしてきたそんな距離感は、このフィールドワークにおいては、はっきりと認識できるものになった。

ぼくにとって、この1年間の成果はそこにある。

中学生と話すスタンスをどこに置くか。なにを念頭において話すか。瞬間的な場面におけるゼミ生との役割の融通。そもそも行ける回数有多寡。忙しいときに参加したときの自分の心持ち。その変化。

三角測量的に、常にいくつかのポイントによって、自分と対象との距離感が瞬間瞬間に現れてきた。

そうすると相手の立つ場所も、コミュニケーションにおける単なる二人称の視点から少し広く深く、慮れるようになってきた、気がする。これが想像力というやつなのだろうか？

結果から言えば、やはりぼくはぼくの距離感を保ってしまった、とは思う。

でもこれは来年の課題に持ち越そう。

少なくとも、こんなふうに自分のコミュニケーションを多角的に見られるようになっただけでも、ぼくにとっては成果なのだ。

この報告書のタイトルには、演習という言葉がしっくりきた。

今年度がはじまるときに、6期生でフィールドワークの意義を話し合ったのを思い出す。

研究のため？社会貢献？目的なんてない？

そのときは結局、画一的な答えが出なかった。

この「距離感の演習」というのは、1年かけて見つけた、ごくごく私的なぼくにとつての意義だ。

手取り足取り教えてもらったわけじゃなく、実際の場合と経験に基づいてきたから、演習。

でも枠組みはあって、みんなと協力し合えるし、なんだかんだどこかしら甘えはあるしで、決して実践とはまだ言えない。

どちらにせよ、このフィールドワークは自分のためにある。自分のための演習である。今だからこそ、そう振り返ることができる。

次は、もっとこういうふうに、強引に私的に主観にたぐりよせて、自分事にしていくことから、距離を縮めていこう。

Friends プロジェクト報告書

塩原良和研究会 6期

31155849

佐藤公耶

「普通」とは何だろうか。私が鶴見夜教室の中学生と初めて出会った時に抱いた感想は、「なんだ、普通の中学生じゃないか。」というものだった。春合宿での鶴見の散策で夜教室の中学生が通う学校を見た時も同じ感想を抱いた。その時、先生が言った言葉の意味を一年かけてやっと理解することができた。

「普通に見えても、それを全てだと思わずに、間をおいて考えることだ。」

私と中学生との日々は「普通」の連続だったと思う。一緒に勉強して、解ける問題があつて、解けない問題があつて、中学校の先生の愚痴を聞いて、ゲームの話をして。まぎれもなくそれらは私の学生時代と同じだった。また彼らは、ゼミで扱った文献のように、生活にひどく困窮しているようには見えなかった。ゆえに私は、彼らを「普通」という色眼鏡で見えてしまっていた。色眼鏡をかけた瞬間に想像力は働かなくなるものであり、私も自分が「普通」だと思っていることを「普通」の彼らに押し付けてしまっていたと思う。それが結果として現れたのか、夜教室に来る中学生は減っていった。このプロジェクトの一つの目標であった居場所づくりのためには、相手を真に理解することが大事であるが、「普通」という型が中学生個人個人を理解することを阻害したのだ。そのことにうすうす気づき始めたとき、中学生たちについて、私が思う「普通」と彼らには多かれ少なかれギャップがあるということに気付かされることがあった。これで彼らに対する「普通」という型は完全に崩れた。

それから私は、中学生と話すときにできるだけ型にはめないように心掛けた。「普通」という型だけでなく、あらゆる型は、深く個人を知ろうとする際には、邪魔になる。思うに「普通」とは、「中学生」や「勉強嫌い」、「先生嫌い」や「ゲーム好き」といった珍しくはない属性の足し算から導き出される一つの答えである。そして、「中学生」や「勉強嫌い」、「先生嫌い」であるから「普通」と仮に導き出したとしても、彼が必ずしも「ゲーム好き」とは限らない。目に見えやすい属性にばかり注目して、型にはめてしまえば、見えにくい属性が見えなくなってしまう。そういった見えにくい属性こそ彼を特徴づけるものであることが多い。

「普通に見えても、それを全てだと思わずに、間をおいて考えることだ。」

この言葉の解釈を身に染みて学んだ一年だったように思う。

二年間

水野佑香

塩原ゼミに入り、二年経った。

一年目の夜教室では、受験というみんなの目標がありそれに向かって毎週土曜日、夜教室に参加することができた。もちろん勉強だけの毎日ではなかったけど、大きな目標一つあるだけで何となく参加しやすかった気がする。やっぱり私には「勉強を教える」と言う面が強く出てしまい、生徒との距離は勉強を通してだったような…。

二年目、皆の受験が終わり本当の意味での「居場所づくり」が始まった。「受験」という目的がなくなったのは私にとって大きかったと思う。何を通して子供たちと話せばいいのか分からなかったし、何かを通さなきゃ子供たちと話し手はいけない気もしたり、ぼんやりとしたよく分からない関係だったなあと今になって思う。はじめの頃、5期の話し合いの中で、土曜日のあの教室をどのような場所にしたいかと話し合った時、「部室のような場所」というのが自分の中で引っかかった。最初は「あ、それだ」と思ったけど、時間が経つにつれて本当にそんな場所にしたいのだろうかと考えはじめるようになった。私にとっての「部室」のような場所とは、入るのも出て行くのも自由で、そのコミュニティーに居たいと感じることのできる人間が集まることのできる場所だった。そう定義したときに、やはり土曜5時のあの場所は部室ではない、全く違う環境だと感じた。

そんなことを考え、どんな場所にしたいんだろうと夜教室に行くが無目的というか何をしていいか分からない状況が待っていて、子供たちと何を話していいか分からなくて、ゲームの話や、近況などを話す日が続いた。時々しか行かないけど、何となく覚えていてくれたり、前回の会話の続きが始まったり、自由に話せる環境があって、この2年間を通してずっと続いてきた場所なんだと感じた。そして、今後も多分続いていくものだと思う。

三田の家の居場所づくりとは、終始違うと感じてきた鶴見での活動。本当は彼らが私たちのことをどう思っているか分からない。私たち自身で悩みすぎたことも多かったと思う。特に2年目は個人と直接向き合うことによって発見できたことも多かった。目的がないことで、何も通さず直接彼らと向き合えたのかもしれない。去年より、発見の多かった。

来年、私たちは彼らのことを見ることができない。どのようにかわっていくのか、その変化の過程にあの場所はどのように関わってくるのか、楽しみで不安でもある、最後の最後まで。

「あたりまえ」を疑うこと

6期 佐川菜津美

私たちは、たくさんの「あたりまえ」に縛られて生きている——この1年間、フィールドワークコーディネーターとして携わってきた鶴見夜教室で、最も痛感させられたことである。

「高校に行き、大学に進学し、就活を勝ち抜いて、新卒入社して働く。」

——自分の生きてきたライフコースが標準的である。

「お金を持っているから、iPhoneを持ち、iPadを持ち、大きな家に住む。」

——誰も皆、金銭的余裕があるから消費行動をするものだ。

こうした私たちが「あたりまえ」だと思っていることは、当たり前ではない。いうなれば、自分たちの経験してきたライフコース・ライフスタイルを物差しにして、目の前で見えていることだけを材料にして価値判断をする、ただの「思い込み」である。

全日制でも定時制でも何でもいい、高校に行かなくてもいい、高校を途中でやめるかもしれない、大学進学はしないで働く、そういう選択肢がある。しかし、自分が経験してきたライフコースとは異なる道を選択する意思を中学生から感じるたびに、思わず驚き、不安になり、「でもやっぱり〇〇すべきでは」と焦ってしまう自分。iPhoneを持っているからといって、大きな家に住んでいるからって、金銭的に裕福というわけではない。しかし、SNSでアピールしている生活風景から彼らの生活水準を図り、その裏腹の実情に想像力が及ばない自分。この「思い込み」に縛られていた自分に気付いた時、私は恥ずかしくて、情けなくてたまらなくなった。彼らのライフコースを心配したのは、もちろん彼らに「善く生きてほしい」という思いが強いからであった。高校に進学し、たくさんの物事に触れ、たくさんの人と出会うことで、世界を広げ、人生の選択肢を広げてほしい。本気でそう思っている。でも、きっとそれだけではなかった。自分にとっての当たり前からズレていることに不安を感じ、自分の「あたりまえ」を疑うのではなく、そのズレを軌道修正しなくては（自分が当たり前だと思っている道に相手を誘導すべき）と、相手に自分のあたりまえを押し付ける意思が働いていたように思う。

こうあるべき、こう見えるから〇〇そう、そんな「あたりまえ」が世の中のいろいろなところに溢れている。そしてその「あたりまえ」が、意図しないうちに誰かを傷つけ、生きづらくすらししてしまう。これを打破するためには、「あたりまえ」を疑い、想像力を働かせること。そのためには、まず「あたりまえ」を疑うことが出来ない自分に気付かなければならない。そういう気付きを得ることができる「場所」が必要なのだと、切に思う。

Friends プロジェクト報告書

福澤 美奈

「子どもたちにとって、“鶴見よる教室”はどんな空間なのか——」

「子どもたちにとって、わたしたちは何者なのか——」

夜教室を通して私たちはこの問題にずっと頭を抱えてきたし、もしかしたら今後も悩み続けるのかもしれない。

正直、はじめは塾と何が違うんだろう、なんて考えることも多かった。担当制で勉強を教える前期のよる教室では、さながら塾のような光景が広がっていた。

「ここは塾なのか？わたしたちは塾講師なのか？」

そんな疑問に対するはっきりとした答えが見つからないまま、それでもなんとなく、鶴見に足を運んでいた。

そして、10月5日——。恐れていた事態が起こってしまった。

生徒が来ない。

今振り返ると、この事件はわたしたち6期が本当に真剣に「よる教室」というものに向き合う転機であった。

このままのやり方でいいのか？

もっと生徒一人一人と向き合わなければいけないのではないか？

そもそもわたしたちは彼らに何をしてあげられるのか？

ゼミ生同士が本音でぶつかり、「よる教室」と真剣に向き合った。それは同時に、「生徒」としての子どもたちではなく、一人の「人」としての子どもたちに向き合い、彼らを知ることでもあった。

わたしたちは塾講師ではない。

塾とは一線を画したこの教室で求められているもの、それは「楽しさ」だ——。

これが、わたしたち6期が出した結論である。

この前提をもとに新たな教室作りに励んだ結果、子どもたちは戻って来てくれたが、とはいえ、わたしたちの関係はまだ未成熟だ。

未だに子どもたちとの距離を感じないわけではないし、夜教室や自分たちの存在の定義だってはっきりとはわからない。

それでもわたしたちは、変わらず鶴見のラウンジに足を運ぶのだろう。

自分たちを悩ませ、ときに苦しい思いを経験させてくれるあの空間へ、「行かなきゃ」から「行きたい」へ。

わたしたちの意識は、確実に変わってきている。

私は塩原ゼミでのこの1年間、「異なるものとのかわり方」について考え続けたように思う。

私はこれまで狭い世界で生きてきた。自分と似ているような人達とのみ行動を共にし、異なる人とは距離を置いて生きてきた。

慶應生がよくやるバイトとして、塾講師・家庭教師バイトがある（確か1位だったような…）。だが、私は絶対にやりたくなかった。なぜならば小学校から高校まで勉強を苦痛に感じたりつまずいたりした経験がないため、勉強が嫌いであったり苦手だという人の気持ちが理解できないと思っていたからだ。本当は理解しようとしていなかったのであるが。

そんな私にとって、夜教室の子供達の学力は衝撃的だった。話には聞いていたが、本当に九九ができない。私は小2の時、一人ストイックな反復練習で九九をマスターした。さらにリアルに集中力が3分と持たない子がいる。私は小学生のころ、朝から塾にこもって勉強していた記憶がある。そんな子達を目の前に、（中3にもなって甘えるな！！）とひっぱたきたい気持ちになったが、立ち止まってかれらの話を聞いてみた。どうやらDJになりたいらしい。（本気で言っているの？大丈夫？）と思ったが、もう一度立ち止まって聞いてみる。DJ機器を買うために、お父さんの仕事を手伝ってお小遣いを貰うのだと楽しそうに話してくる。（こんなに頑張れる子だったのか）と驚いた。また朝礼で読む予定の、たった原稿用紙半分、それも新年の抱負という書きやすさ満点のお題の作文が中々書けない子がいた。話を聞いていくと、小さな声で「私日本語が下手だから、話すみんな笑うんだもん」と言ってきた。さらに法律や親の方針のせいで、帰りたいのに帰れないという話もしてきた。（まだ中3でしょ。そんなに頑張らなくてもいいのに…。）と抱きしめたくなった。

ゼミ生とのかかわりもそうだ。6期のほとんどが、同じゼミでなければ話もしなかったであろう人達だ。そのような人達と対話し、共による教室を運営し、プロジェクトを作っていくことは苦痛を伴った。「歩み寄りしたいけど、こんなに考えや大切にすることが違ってははどうしようもないのではないか」と限界を感じたこともあった。そんな中、ゼミ外の理由で私は6期を離れることを決めた。どうせ去るなら何かを残して去りたいと思い、ぶつかってみた。その結果、苦痛を感じていた原因の中には自分の価値観がまだまだ狭いことや、それを相手に押し付けていたことがあると気づかされた。

自分と違うとつっぱねるのではなく、立ち止まって話してみると新たな発見がある。また異なれば異なるほど面白い、異なるからこそ面白い。違うものは違ったままでもいい。そう学んだ1年だった。私は留学する。日本にだって多様な人々がいることを知った1年でもあったが、世界にはより多様な考えを持つ人がいるだろう。そのような人々との出会いにわくわくしている。1年前の私はびっくりであろう。

よる教室が楽しい、と感じたのはいつだったか、私はまだ覚えている。

前期は勉強を中心に、担当制や席の配置などを手探りでいろいろ試していき、時には見切り発車に近い形で進めてしまったこともあった。

しかし焦る気持ちとは裏腹に、日に日に来る中学生の数は少なくなり、ついに秋学期に入ってから数回目、参加人数は0に。

あの時、「大変だ」という気持ちと同時に「でもあの子たちにとってほかに居場所や勉強できる環境があれば、私たちは必要ないのではないか」という議論になったことがあった。今思うとあれは、自分たちに相手が何を求めてきてくれているのか、などについて考える前に、相手の事を勝手に想像して、勝手なイメージのもとでさも相手になったふりをして、自分たちの招いた結果を「しょうがない」と言おうとしていたようにも感じられて。

今さらながらに互いに互いを変える可能性を完璧に捨て去ってしまう一歩前だったんだな、と少しひやりとする。

楽しくなったのは10月19日。自分がよる教室のラインに参加した日。みんなで大きな島を囲んで、他愛ないことをおしゃべりして。久々にいじられる感覚にちょっと「うおっ」とテンパってみたり、某M女史に謎なあだ名をつけられたり。

その日から、担当でない日でもよる教室に行くようになった。行ってはいじられ、まじめな話をして、滑ったり。でもちゃんと勉強に打ち込んでくれる時もあったり。

今これを書いているときにはまだ彼らの入試は終わっていないし、もちろん不安なこともたくさんある。それをどうにか解消するには、自分のようなスタンスは甘いのかもしれない、でも今のよる教室にも、何かを解消する力があると思う。

でも、勉強に打ち込む。という目標ひとつとっても、彼らにとっての当たり前と私たちにとっての当たり前は大きく違うと思うし、よる教室の舵を取るのは私たち大学生であることを考えると、船が沈没しない程度に抑えることももちろん重要だけど、舵を手放す、というのも大事なんだと思う。

少なくとも、自分にとってよる教室に来てくれる子供たちは、すべてを擲ってでも守ってあげたい、とまでいかななくても、ふとした瞬間に顔が浮かんでくるくらいの存在になった、同時に幸せを祈るくらいに。

よる教室のラインのサムネイルになっているのは、恐ろしくぎこちない顔をした自分で、自分ではお世辞にも愉快とは言えない写真だけど、写真にとられるのが好きじゃない自分

にしては珍しく、その写真を見ている、その写真の不出来さに絶望するよりも、最近のよる教室の様子が思い浮かぶ。

自分勝手なことをたくさん書かせてもらったけど、最後に、よる教室に来てくれるみんなと、一緒に頑張ったゼミ生と、特に尽力してくれたFWコーディネーターに感謝と「また来週」の言葉を。

2年間もやってきたフレンズプロジェクト（以下FP）もついに終わりました。じゃあ、肩から重荷が下りたかと言われれば、そもそもこれらのプロジェクトが荷物でもないのそんな開放感もないし、別れにつきものであるわびしさも、なんだか感じません。高校生との最後の腕相撲で手首に痛みが残ったくらいです。

去年の報告書の編集から半年程度たちました。ゼミ生の文章を読み込み、FPにこめられた思いや意味を自分なりに何度も反芻して考えていました。昔やってきたこと、いまやっていること、これからやりたいこと、自分なりにできること、後輩にやってほしいこと、やってはいけないことなどのさまざまな「もがき」が込められてきた活動であり、その解釈もそれぞれにあることを理解しました。FPの歴史も探りました。それらを踏まえても、いまの私にはFPがなんのためにあるのか結局のところわからずじまいになりそうです。

多文化共生をさぐる試みと夜教室をとらえるなら、私にとっての本質は異なるものでした。ひとりひとりの生徒には名前があり、固有の存在であって、多文化の中に一括りすることに違和感を覚えます。生徒は多文化の前に友人だと思いました。そして、友人がそうであるように、夜教室も文化の関係のない居場所を通したつながりを確認する場のように感じます。だとしたら、多文化共生とはなんなのか。多文化の先にある、私達の人としてのつながりを共生と呼び、それが成立する場を居場所と呼ぶのであれば、夜教室にある多文化は一体何の意味を持つのでしょうか。その「居場所」の意味を考える道具なのでしょうか。

「生徒がふらっと立ち寄れる」究極的なゴールとは、生徒自身がほかに拠り所をもち、教室自体がなくなるような居場所です。そこをゴールにした瞬間、正直に言えば、私には「そこにただいること」以外やれることはなくなっただけだと思っていました。夜教室とは、どこにもあるたまりのような場所であり、たまたまそこにいる大学生が奇遇にもそこに居合わせた高校生を相手する場であり、一瞬でも客観視してしまえばその存在が非常に危うくなる場所です。高校生にも大学生にもその場に参加する義務はないからです。それを考えた時に、夜教室がいったところでものすごく疲れる場所になり、足が遠のいた時期がありました。最後までやる気は結局あがらなかったのですが、それでも足は鶴見に向かっていきます。その理由は、一義的に、高校生のためではなく、そこに塩原ゼミがあるからだと思うのです。私にとって高校生にあうことよりもゼミ生にあうことのほうが意味が強いためです。そう自分に正直になった時、再び僕の足は夜教室に向かいました。

塩原ゼミがあつまるのは、そこに高校生がいるからだよ、といわれればそれはそうなのかもしれないのです。でもその高校生という存在は塩原ゼミの変化のための触媒みたいなもの

で、もちろん高校生も変化するのですが、ゼミ生の変化のほうが大きく、目に見える形で変化するとおもうのです。すくなくとも僕は、どこかで高校生に変化を期待しながらも、どこかで自分が高校生に何をできたかを考えることを通して、自分がどうか変わったのか興味がありました。そして、6期生が困難に直面するのをみて、先生の発言を聞いて、この活動がすくなくならずゼミ生の変化を重要視しているものだと感じました。その事実、高校生を考えながら、結果的に大学生の変化を期待する一縷の矛盾と妙な納得を感じました。

同時にそれらの変化は塩原ゼミという基盤においてはじめてなりたつものであるともおもいます。仮に、塩原ゼミのメンバーが、あったこともない人たちで構成されていたら、私は行きません。さまざまな悩みを抱えるゼミ生だから成り立つ場とは、塩原ゼミがなくなれば瓦解するかもしれないということでもあるとおもいます。そのつながりを、できればもっと強固にしたかった。しかし今年1年間には、自分がそこにはいる隙間はなかなかみつかることができなかつたのです。

まとめると、鶴見夜教室が、多文化共生を学ぶ場としての道具でしかなく、そしてその多文化共生すらも、社会的な紐帯を感じるための道具なのかもしれないとおもってしまったのです。たしかにそこに高校生という存在のオリジナリティーは介在する余地は間違いなくあり、よる教室には何にも変えられないすばらしい価値と思い出があった。でも釈然としないのです。

無目的の目的化、議論ではなく対話。いろんなことを学んだつもりでいましたが、結果を求める自分は2年間なにも成長していないのかもしれない。

まだこの活動がおわったともおもいません。どこかでつづいていくことだとおもいます。点数も評価も終わってからつけるものなので、いつか正当化されるささいな考えを、最後の報告書にします。

Friends プロジェクト報告書原稿

文学部人文社会科学人間科学専攻

11017241 吉川 春香

今年度の活動は、三田の家では IFG の活動とクロージングイベント、鶴見では、特別なイベントよりも日常的な居場所づくりの曜日が特に印象に残った。

三田の家では、発表のために話し合い、料理をして、一つの課題に向かって IFG 全体で活動したおかげで、後輩とコミュニケーションを取ることが非常に苦手な自分でも、（少なくとも同じ IFG の後輩とは）就活についてよもやま話をするくらいには交流できるようになっていた。またクロージングイベントには、日頃は交流する機会がなかったであろう方々がいらして下さった。特に、とある近隣にお住いの外国の方は非常に楽しそうにしてくれていた。惜しむらくは、その人が三田の家の存在をクロージングイベントの日に初めて知ったことだ。確かに普段の三田の家は、外側から見ると通常の民家に見えて、注意して看板を読まないと交流の場であることが分かりにくい。クロージングイベントの日はイルミネーションや提灯で、人を惹きつける、注目しやすい要素が強かったから気づいてもらえたのかもしれない。

鶴見の高校生の居場所作りプロジェクトでは、企画されたイベントもそれなりに楽しそうにしていたが、それよりも高校生達が「なんとなく」あの場に来ていることが印象的だった。一部の5期生は全体の様子や、高校生達がいささか退屈しているような様子・発言を受けて、来なくなってしまうことを危惧していたが、私から見れば特に差し迫った勉強の必要性が（受験の時期に比べれば）無いのに、「ちょっと顔出してみた」レベルでも立ち寄ってくれるのはすごいことに思える。高校生になった彼らは、勉強に部活にバイトと忙しい。土曜であれば家族単位でのイベントもあるだろうに、なんだかんだ言いつつも、最終的には高校生達の多くが来ていた。それは昨年、小沢氏を始めとした他の5期生達が、彼らと真剣に向き合ったからこそだと思う。（こう言うと彼らは、特に小沢氏はまだまだやれたと否定するけれど、それでも高校生達から見れば「お前ら、このままだと本気でやばいぞ！」と喝を入れてくれる存在は貴重なものではなかつただろうか？）私はこの年は参加できなかったが、今年度から参加して、約一年間、高校生の他の5期生への信頼を感じてきた。

最後のタイムカプセル作成の日には、普段なかなか来ない高校生も来てくれていた。彼らがこれからも勉強・進路・恋愛・人間関係など様々な悩みを抱えたとしても、受け止められる居場所であるよう、後任の6期生達に期待したい。

Friends プロジェクト ―今年度のゼミ活動を振り返る

6期 水野上萌

―場所と時間。塩原ゼミでの1年間、この2つについて考えさせられることが多かったように思う。

―場所。

今年度の10月をもって、キャンパス以外で、第二の塩原ゼミの活動場所として長年愛されてきた三田の家が閉鎖された。先輩に連れられ初めて三田の家の門をくぐった2年生の秋。そこには長いあいだ蓄積された生活の匂いが、感じられた。そして塩原ゼミひとりひとりがそこを自分なりの“居場所”として過ごしていることが感じられた。三田の家で触れた塩原ゼミを、わたしは「家族みたい」そう直感的に思った。

そんな三田の家が閉鎖される。そう知ったときはショックだった。そして私たちよりも三田の家で過ごした時間の長かった5期生やOB・OGの先輩の寂しがる声がより私を悲しくさせた。やっとな三田の家を自分なりの居場所として感じ始めていた矢先のことだった。

そしてひとつのムービーを完成させた。「三田の家-the movie-」オリジナルの脚本に沿った、シェアハウスをする男女4人組の無声映画。わたしはそのうちのひとりを演じさせて頂いたが、撮影が進むにつれてより三田の家への愛着が高まった。そんな中でのクランクアップ、そして三田の家さようなら会。「場所」の温かみとありがたさを少しでも教えてくれた三田の家にありがとう。

―時間。

1年間はあるという間だ。だが、アツという間にも様々なことが起きる。鶴見よる教室で外国にルーツをもつ中学生とのあつという間の1年間にどのようなことがあったのか。

春学期はゼミ生・中学生ともにお互いを模索していた。週1回彼ら彼女らと時を共にする。しっかり勉強を教えたい。一人一人にと向き合いたい。そのような思いから始まった担当制は、あとから考えるとまるで「塾」だった。「塾」は2つもいらぬ。生徒たちは10月には一人も来なくなっていた。

そんな壁を打ち壊すために、私たちは一から考え直した。その間に私は「時間をかける」ことの重要性を感じた。遠回りをする。効率を求めない。焦らない。短い時間で生徒とわかりあおうとすること自体無理な話。そう考えると、今までの半年間は無駄なんかではない。SNSを使わずにあえて手書きのお知らせを書いてみる。「雑談」の時間を長くとってみる。ひとりひとりに向き合うことは、1対1の関係だけではなく、「みんなで一緒に」過ごすことでもできる。そして生徒と一緒にいる時間を楽しむ。時間が経つと自然と楽しめている自分がいた。「時間の無駄」なんてない。そうよる教室での経験は教えてくれた。

終わりを迎えた三田の家と、引き継がれる居場所づくりプロジェクト

2014年1月25日をもって、私たち5期が塩原ゼミとして関わる Friends Project は全て終了した。これを機に、二年間携わってきた当活動の個人的な総括をしたいと思う。

三田の家での活動は、2013年度途中で突如幕を下ろすこととなった。それを知った私たちは、まるで打ち切りが決まった漫画家のように終着点を求めてクロージングイベントを企画した。イベント自体は最後らしい盛り上がりを見せ、その場に居合わせた者全員にとって、三田の家での活動が「楽しい思い出」として昇華された瞬間であった。しかし同時に、打ち切られた漫画のように、まだまだ語り明かされていない要素が多いまま終わってしまったという印象は色濃く、不完全燃焼感がどこか否めない活動でもあった。それでも、三田の家での活動を通じて得た数々の学びは「三田の家」という特殊な空間でゼミ活動をしていたからこそ得られたものが殆どであり、つくづく興味深い活動をしてきたものだと思うばかりである。将来的に三田の家に代わる活動が生まれることを願っている。

高校生居場所づくりプロジェクトは、昨年度の学習支援活動から継続したものだと考えると、まさに私自身の塩原ゼミにおけるライフワークならぬゼミワークであったとも言える活動だ。活動内容に対する不安を常に感じながら歩んできた一年だったが、最後にこの活動の可能性をこの一年で最も実感する形で終えることが出来た。「無目的の目的化」という概念をこの一年間掲げてきた。特定の目的を敢えて持たないことによって、「誰もがふらっと立ち寄れる場所」、「サークル的な雰囲気」が生まれる土壌を育むことを目指した。結果として、「ラウンジの居場所としての確立」と「高校生との信頼関係の熟成」が達成されつつあると実感している。この活動は一方で、とても儂いものだ。週一回の活動である上に、時間を掛けるプロセス。一年、実際には9か月という限られた時間で、もどかしさを感じる瞬間は少なくなかった。折角居場所と信頼関係を育んできたのに、私たちは卒業し、今後は以前のように高校生たちと場所や時間を共にすることは出来ない。しかし、私は今、この居場所づくりプロジェクトに大きな可能性を感じている。それは6期生が自発的に高校生たちとの活動を続けていきたいと意思表示をしてくれたことに始まる。そしてラウンジの仕切りを極力解放し、6期と私たちの活動の境界線が希薄になっていくに連れて、私たちが作ってきた「居場所」が6期に伝播しているように感じられるようになった。高校生たちも、来年度は勿論の事、6期に2月も活動してくれと意見し始める始末である。ラウンジを居場所として、信頼関係まで伝播していけば、今後も継続的に、そして活動をさらに発展させていくことが出来るのではないかと、期待をしている。高校生たちは今、私たちに「～したい」という意思表示をするようになってきている。来年度は是非、一人一人のそのような声に応じて欲しいと、我儘ながら思っている。

2年間のFWを振り返って

宗 香里

先日、2年間にわたるFWの最終日を迎えた。タイムカプセルを埋めたり、思い出ムービーを見て、最後に生徒一人ひとりに2年間の感想を言ってもらった。(特に用意していたわけではないが、一人の生徒が自主的に話し出してそんな雰囲気になったのだった。) 建前かもしれない、最後だから花を持たせてくれようとしたのかもしれない。それでも口々に「夜教室がなければ高校に受からなかったと思う。」「感謝しかない」「いつも話を聞いてくれてありがとう。」と感謝の気持ちを示してくれた。普段、生徒とはふざけあったり、悪態をつきあったりしてばかりなので改めて感謝の気持ちを言われたのは初めてだった。高校受験が終わったときも、特になにも言われた記憶はない。むしろ、感謝の気持ちをもって来ていた、示してくれたことに驚いた。私にとってはごく「当たり前」に彼らと接していたことが、そこまで感謝に値するとは考えたことがなかった。でも感謝されると嬉しいもので、安易だが、2年間のFWは成功したのでは、と思った。FWの成功、を私なりに定義すると、彼らと良い関係が築けて、これからも連絡のとりあえる仲でいることだ。

2年間、もしくは1年間面倒をみた彼らについて、私は自信を持っている。たぶん彼らはこれから社会でやっていけると。大変なことやくじけることがあっても自分のちからで乗り越える、もしくはきっと周りが助けてくれる、そんな子たちだと思う。なぜなら、2年間のFWが成功したのは学生の努力というよりも、生徒たちの人柄にあったと思うからだ。もちろん、私たちも努力したが、正直ぐだぐだなことが多々あったし、「来週から誰も生徒が来ないかもしれない」と思ったこともあった。最初のFWまでは「どんな子がくるんだろう」と少し身構えていたが、一番最初にあった彼らはとってもかわいい普通の中学生だった。しかも、私の持っていた中学生のイメージより、格段に素直でいい子達だった。それは今も変わらない。彼らとすぐ仲良くなれたのも良い関係が築けたのも、彼らの人柄にあったところが大きい。いちど、私が大幅に遅刻した日の夜、彼らに謝罪のメールをいれたことがある。「今日はみんなより遅れてごめんね。これからこんなことがないようにします。」そうすると一人の生徒が「誰にだって失敗はあるよ！まあ落ち込むな」そんな返信をくれたのだった。そんな彼らだからこそ、時に失敗することがあろうとも、特に共通項もないような大学生と、すぐ打ち解けて仲良くなれる彼らはきっとこの先もやっていけると感じる。もちろん、彼らがつまづいたり悩むこともあるだろうし、その時は力になってあげたい。けれど、生徒たちは人懐っこくて優しく、素晴らしいものを持った子たちだと思う。ひとつ、FWの反省点、思い残すことは「来なくなった生徒」たちである。彼らは今どこで何をしているのだろうか、途中まで来ていたのにどうしてこなくなったのだろうか、単純につまらないからか、他に楽しいことが見つかったか。それならいいけども、今彼らが何をしているか知る方法もないし、知る方法を得るところまで彼らとの関係を築けなかった、それが私の唯一の後悔である。

3年生の春になって、初めてよる教室に行ってから、すでに10ヶ月が過ぎようとしている。今までも外国につながる子どもたちへの学習指導をしていたからだろうか。初めてよる教室に行った日はあまり緊張していなかった。まだ大切なことに気づいていなかったからかもしれない。今までやってきた学習指導とこのよる教室はまったく異なるということに。私たちのよる教室は、中学生にとっての“居場所”をどうやって一緒につくっていくのか、自分たち自身で考えていく。本当は私にとって初めてのことばかりだった。

前期、予定があつてなかなかよる教室に行けず、中学生と着実に信頼関係を築いているように見えるまわりのゼミ生と、自分とのちがいに焦りを感じながら後期をむかえた。あれから5ヶ月ほどがすぎ、高校入試がいよいよせまってきている。面接の練習を一緒にしていると、いままで知らなかったみんなの一面が見えてくることもある。中学から日本に来て、全然授業についていけなくて、でも一生懸命がんばって今では授業の内容もだいぶわかるようになったという女の子。高校では、もっと日本語と英語を勉強して、外国人の友だちもたくさんつくりたい。そのことを話している時の彼女の目はすごく生き生きとしていて、とってもすてきだった。ひとりひとりにきちんと向き合うことを大切にしていきたい。

“相手の心をよむ”

このことを、私は普段のゼミ活動や夜教室でできるだけ心がけてきた。私自身が、あまり自分のことを積極的に話したいと思う人ではないからかもしれない。言葉には表されない、でも相手が伝えたいと思っていることに気づける人になればと思っ
ている。
私たちが接している中学生は、「外国につながりをもつ子どもたち」とカテゴライズされるけれども、それぞれ異なるバックグラウンドをもっていて、抱える悩みだったり不安もちがう。それは私たちゼミ生がそれぞれ異なることと同じことだろう。なにか悩んでいることがあったり、つらいことがあったら、

ふと話せるようなそんな場づくりをみんなで作っていきたい。

『自分にとって本当に大切な人は、自分がその人にどれだけ時間をかけられるかということ』
高校の恩師の言葉が思い出される。

2013年度 FP 報告書

「あなたはあなたでいい」

5期 佐野令奈

2013年度のゼミ活動が終わる今、今年度のそれを振り返ってみて、この一年間を一言に集約するとしたら、「不安」だった。春のソフトボール大会、つるみ国際交流ラウンジの活動やゼミへの復帰、5期や中学生だった皆との再会、新しく始まった居場所づくりプロジェクト、高校生や6期との出会い、初めて参加したゼミ合宿、三田の家クロージングイベント、三井物産プロジェクト…etc。そのどれもが素晴らしくて、自分にとってかけがえのない大切な時間だったことは間違いない。しかしその背景には、いつもどうしようもなく不安だった自分がいた。

私は留学から帰って来てから、いつも罪悪感とフリーライダーのような中途半端さへの申し訳なさから心苦しさを感じていた。同期が一番大変だった時期に、私は何もせず呑気に海外で自分本位に暮らしていた。中学生の皆の一番大切な時期に立ち会えず、何もしてあげられなかった。それにも関わらず、同期の皆が必死に考え抜いて導き出した道の上に、平然と立っている。皆が築いてくれた子供達との絆の中に、厚かましくも身を置いていた。

調子のいいやつと思われているだろうな、話し合いにも参加せず。

今度の企画、参加したいな、でも厚かましいかな…。

そんな不安といつも隣り合わせのまま、けれども誰に相談すればいいかもわからず、自分の感情を押し殺し、自分のしたいように行動していた。また自分本位に。

しかし、そうやって自分本位に行動していくうちに、ゼミの活動に関われば関わるほど、自分に出来ることがあるならばどんなに小さなことでも全部やりたい、私の可能な限り最大限関わりたいという、どうしようもなくわがままで、けれども心の底からの切実な想いが込み上げて来るようになった。

今から思えば、そのような想いでさえ自分本位だった。そのことに気付くきっかけになったのは、2012年12月17日、同期のあるゼミ生について自分の「不安」を打ち明けられた時。その子の返答は、当時の私にとって思いも寄らぬものだった。その子は言った。

俺の意見では、このゼミのFWや活動は責任・義務を中心に構成されていないと思うんだよ。だって皆が皆同じ意識でゼミに取り組んでるなんてありえないじゃん？笑でも、ゼミの信念としてそのように多種多様なゼミへの参加態度を受け入れる土壌があるべきなんだ。

「夜教室にある2つの無いもの」

5月から始まった夜教室。振り返ると、様々なことがあった。自分の中でも感情の変化が見られる。簡単に言ってしまうと、“フィールドワーク”のために鶴見に向かっていた自分が、“みんな（中学生）に会う”ために鶴見に足を運んでいる。なんだか突然、楽しくなった。居心地が良くなった。

たぶんそれは、夜教室にある“2つの無いもの”がカギになっているように思う。

一つ目はルールだ。社会には様々なルールがある。

所属するコミュニティや他人からの視線が、生活範囲を決めてしまい、そのルールに従うことこそが正しく、外れることがダメであるかのような、そんな暗黙のルール。

一方で、夜教室にはルールがない。

来ることを強制されない。勉強を強制されない。時間割がある訳でもない。その日来たメンバーで、その日の状況に合わせて勉強を進めたり、疲れるとおしゃべりをしたり、臨機応変に対応する。

二つ目はスピードだ。社会ではスピードが求められることが多い。

早い対応、早い成果、とにかく遅れを取らないようにと急かされるような、そんな目には見えないスピード。

しかし、夜教室ではゆっくりと時間が流れる。焦らなくていい。自分のペースでいい。それぞれのペースで進めばいい。

活動当初、彼らに“学習支援”をしなくてはいけないと肩の力が入っていた。どうしたら効率良くできるかを考えていた。

しかし、一対一の人との関係に、ルールや効率の良さなんて必要ないと気付いた。

ありのままの自分で、彼らと向き合うこと。自分自身が楽しむこと。

想いは、彼らに伝わっているだろうか。

来年も鶴見のあのラウンジで、彼らと新しい一年を過ごしたいと、心からそう思う。